

ひと烈風録

第37回

医療暗黒大国に風穴 レセプト開示の立役者

医療被害者の立場からレセプト（診療明細書）の開示を求めてきた。その闘いは挫折続きだ。だが粘り強い主張が日本の医療を変えてきた。

ノンフィクション作家 辰濃哲郎

写真 ヒラオカスタジオ

「医療情報の公開・開示を求める市民の会」世話人、高校教員

勝村久司

かつむら・ひさし

1 990年に医療事故で長女を亡くして以来、その死を無駄にしないために闘つてきた。医療の世界は想像以上に固く閉ざされている。風穴を開けようとしてははね返され、また挑むの繰り返しだった。最後までこだわったのが「レセプト（診療明細書）の開示」だ。周囲があきれるほど愚直に、そして執拗

に説いてきた。

医療事故の被害者でありながら、医療政策の要ともいべき厚生労働省の中央社会保険医療協議会（中医協）の委員を6年務めた。

そこで医療の砦を崩した。

今では病院で支払いのときに誰もが当たり前のように明細書をもらえるが、それは15年に及ぶ闘いで手に

入れた患者の権利であることは、あまり知られていない。

陥り、そして長い道のりだった。

京都府木津川市に住む勝村久司（55）は、大阪府立牧野高校の理科の教員だ。バドミントン部の顧問も務める。平日だけでなく、週末も試合や練習に明け暮れるから、医療にかかる市民運動に費やせる時間はわ

ずかだ。深夜にパソコンに向かい合い資料を読みふけるから、朝に弱い。起こしてくれるのが妻の理栄（55）だ。服装には無頓着な勝村に代わって、スリーツから靴下まですべて理栄が用意する。ネクタイも首にかけて締めるだけでいいように、いつでもわつかを作つてから渡す。

東大阪市で生まれた勝村は、マン



「心にスイッチが入ると、どうしても感情移入してしまう。真剣になると涙もろくなるので、最近は一生懸命にならないコツを覚えてきた」と笑う

